広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第41号　2013．3〉

保育カンファレンスの外部公開は他園からの参加者に何をもたらすのか

松本　信吾　　中坪　史典　　杉村伸一郎　　金岡　美幸
日切　慶子
（研究協力者）境　愛一郎　　刘　原婧璇　　保木井啓史
濱名　　潔

１．はじめに

保育カンファレンスとは，医師，看護師，カウンセラーなどの専門家が行う臨床事例についての意見交換や協議を保育に適用したものである（森上，1996）。幼稚園教育要領解説（文部科学省，2008）には，「（保育の）反省や評価を自分一人だけで行うことが難しい場合も少なくない。そのような場合には，他の教師などに保育や記録を見てもらい，それに基づいて話し合うことによって，一人では気づかなかった幼児の姿や自分の保育の課題などを多角的に反省や評価していくことも必要である」とあり，保育をよりよくするためには，他の教師と話し合うことが必要であることが明記されている。また，保育所保育指針解説書（厚生労働省，2008）にも，「保育の質の向上を図る上で研修が重要であり，中でも同僚との話し合い，自らの保育を振り返りながら次の課題をみいだすために，職場内での研修を行うことが大切である」ことが明記されている。このように，保育の質を高めるために保育カンファレンスを行うことが推奨されている。

保育カンファレンスを行う効果として，園の中で同僚と学び合い多様な意見を交わすことで，日々の保育を振り返り，新たな気付きを得ることができる（中坪・秋田・増田・安見・砂上・箕輪，2010），他者の意見を通して保育に内在する自身の問題を発見できる（平山，1995）など，保育者の省察をうながし，反省的実践家としての保育者を育成するための機会として有用であることが指摘されている（森上，1996）。

このように，保育カンファレンスの必要性が指摘され，保育者の資質向上に寄与する有効性が報告されているが，実際の保育現場では保育カンファレンスはそれほど行われていないとの報告がある。平成21年度文部科学省委託事業「幼稚園における幼児教育支援方策に関する調査研究」の「⑦幼稚園教員等の研修の在り方調査報告書」（2010）によれば，全国129園に対する質問紙調査において，カンファレンスを含む園内研修を全く行っていない園が１割，年間を通して実施日が６日以下の園が６割あり，定期的に園内研修が行われていない実情が示されている。その理由として，時間の確保が難しいことや，カンファレンスを進めるファシリテーターの存在が不足していることが指摘されている。そして，今後の課題として，園内の日常的な振り返りやカンファレンスを指導する「園内指導者（ファシリテーター）」育成の必要性や，幼稚園教員の研修・資質向上に関して，充実した情報提供の必要性が述べられている。

また，たとえ保育カンファレンスを実施しても，有効に実施されないことも多いことが指摘されている。田代（1995）は，保育カンファレンスを有効に実施するためには，（１）「発言の対等性」，（２）「話の具体性」，（３）「実践との循環性」の３条件が必要だと述べているが，実際には，管理職や年配保育者が参加することで，協議の進捗に関係なく，最終的にはこれらの者の発言に結論が集約されていく（鳥光他，1999）ことが多く見られるというのである。

以上の，なかなか保育カンファレンスを実施できない，保育カンファレンスを行っても有効に実施されないという２つの課題を受け，広島大学附属幼稚園では，より実施可能性があり，保育者の資質向上に有効な保育カンファレンスの方法を検討することを目指して，外部の保育者も交えて協同でカンファレンスを行う取り組み（以下，公開カンファレンスと表記する）を昨年度より実施している。具体的には，保育中に対象児

Shingo Matsumoto, Fuminori Nakatsubo, Shinichiro Sugimura, Miyuki Kaneoka, Keiko Higiri, Ai-ichiro Sakai, Liu Yuanjingxuan, Takafumi Hokii, Kiyoshi Hamana: What does the outside exhibition of the early childhood education and care conference bring outside kindergarten teachers?

のビデオ動画を撮影し，その映像を『子どもの経験から振り返る保育プロセス』(秋田・芦田・鈴木・門田・野口・箕輪・淀川・小田，2010）に示された手順を用いて，筆者の一人であり大学教員である中坪がファシリテーターとなり，外部の保育者も交えてカンファレンスを行うものである。本カンファレンスに『子どもの経験から振り返る保育プロセス』を用いた理由は，以下の３点である。第一に，「安心度」「夢中度」という数値化した基準をもとに議論することで，参加者間で互いの発言に対する理解や論点の共有が得やすいこと。第二に，エピソードに登場する幼児の「今，ここ」の理解が目指されているため，日々の様子を知らない外部参加者も意見が述べやすいこと。第三に，「安心度」「夢中度」の評定の後，なぜその数字を付けたのか，その理由と根拠を他人の意見を踏まえ，振り返るプロセスが設けられていること，である。

昨年度の研究「保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか」（松本他，2012）において，公開カンファレンスは内部の保育者，特にベテラン保育者にとって，自園の文脈を超えた新たな視点や新鮮な意見を与えるという点で有効であることが示された。そこで本年度は，外部から参加した保育者に焦点をあて，「安心度」「夢中度」という視点を用いた公開カンファレンスが外部の保育者にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

２．公開カンファレンスの手続き

（１）公開カンファレンスの概要

公開カンファレンスは，2012年５月24日，７月３日，11月19日，2013年２月15日の計４回行なわれた。このうち，本研究の対象としたのは，第１回（５月24日）～第３回（11月19日）までのカンファレンスである。公開カンファレンスは，以下のような手続きによって行なわれた。

（２）対象児の選定

対象児は，３歳児，４歳児，５歳児各１名，計３名であった。対象児の選定にあたっては，４月当初に各クラスの担任保育者が，自クラスの子どもの中で保育をしていて少し気になる子ども，継続して援助をしていきたいと考える子どもを抽出した。

（３）エピソードの収集および抽出

午前中の自由遊び時間の対象児３名の様子を，大学院生(境・保木井・濱名)がビデオカメラで撮影した。そのビデオ映像の中から，対象児１名につき３分程度の映像をエピソードとして抽出した。

（４）公開カンファレンスの進め方

公開カンファレンスでは，まず中坪がファシリテーターとして，会の進め方や「安心度」と「夢中度」の意味についての説明を行った。映像を撮影した大学院生が，エピソードを文章化したものを読み上げた後，ビデオ映像を視聴した。その後，ビデオ映像に基づいて議論が行なわれた。

議論は，以下のような流れで行なった。

＜Step1＞まず，エピソード中の子どもの「今，ここ」の姿についてカンファレンス参加者全員が「安心度」と「夢中度」の評定を行なった。次に，ファシリテーターの司会のもと，指名された参加者が，自分のつけた「安心度」と「夢中度」，およびその理由を述べた。それは，１事例に対して10名程度であり，主として内部の保育者が先に，その後外部参加者が自分の評定とその理由を述べた。

＜Step2＞その後，ファシリテーターの司会のもと，「安心度」「夢中度」の高さ・低さの要因を，「信頼感・安定」「主体性の発揮」「友だちとのかかわり」「環境とのかかわり」の４つの視点から参加者全員で検討した。

＜Step3＞それらの議論を踏まえて，対象児の「安心度」と「夢中度」を高めるために，明日からの保育の中で何ができるのかについて議論を行なった。

なお１回のカンファレンスの時間は対象児一人につき約40分，合計120分程度であった。

（写真1）公開カンファレンスの様子

（５）公開カンファレンスの参加者

公開カンファレンスの参加者の所属は表１の通りであった。このうち，カンファレンスにおいて，「安心度」と「夢中度」を評定し議論を行ったのは，内部の保育者と外部参加者であった。また，第３回までの外部参加者の参加人数は表２の通りであった。

表１　公開カンファレンスの参加メンバー

立場	人数	備考
ファシリテーター	1名	大学教員（中坪）
事例報告者	3名	大学院生（境・保木井・濱名）
内部の保育者	7 ～ 10名	広島大学附属幼稚園長・副園長・教諭・養護教諭・非常勤講師
外部参加者	※表２参照	

表２　公開カンファレンスの外部参加者数

第1回	第2回	第3回	計
16名	27名	30名	73名

外部参加者の内訳は，幼稚園関係者18名，保育所関係者42名，認定こども園関係者２名，大学教員および学生４名，その他７名であった。

３．アンケート調査

広島大学附属幼稚園における公開カンファレンスが，外部の参加者に対してどのような学びを与えているのか，また自園での実践やカンファレンスに活かせそうな内容を含んでいるのかを調べるために，公開カンファレンス参加者へのアンケートを行った。

（1）アンケートの手続き

公開カンファレンス参加者に対して，終了後に毎回アンケート調査を行った。（資料１）アンケートの有効回答数は39であった。

公開カンファレンスについてのアンケート

1．あなたについて教えてください。

2．この公開カンファレンスは何でお知りになりましたか？

3．公開カンファレンスに参加して，あなたにとっての学びはありましたか？

4．あなたの園でのカンファレンスについてお聞かせください。

5．今回の公開カンファレンスに参加してみて，あなたの園での実践やカンファレンスに活かせそうなことはありましたか？

6．本公開カンファレンスが，よりあなたの園での実践やカンファレンスに活かされるために，どのようなことを改善すればよいと思いますか？

ご協力ありがとうございました。

（資料１　アンケート用紙）

アンケートでは，性別，所属，保育経験年数，公開カンファレンスへの参加回数を尋ねると共に以下の質問を行った。

・質問①「公開カンファレンスに参加して，あなたにとっての学びはありましたか」→４件法及び自由記述

・質問②「公開カンファレンスに参加してみて，あなたの園で実践やカンファレンスに活かせそうなことはありましたか」→４件法及び自由記述

（2）アンケート調査の結果

アンケート質問①「公開カンファレンスに参加して，あなたにとっての学びはありましたか？」に対する回答は表３の通りであった。

表３　公開カンファレンスにおける学びの程度に対する回答

1.とてもあった	2.ややあった	3.あまりなかった	4.ほとんどなかった
29（81%）	7（19%）	0（0%）	0（0%）

以上の結果から，公開カンファレンスに参加した外部の保育者は，おおむね学びを得ていることが示された。その中身を述べる自由記述は35人の記述があった。それらの内容をまとめたものが表４である。

表４　公開カンファレンスにおける学びに対する自由記述

内容（人数）	記入例
意見の多様性に言及（21人）	・同じビデオを見ても様々な見方があることがわかった ・自分と違う意見があったことがよかった
カンファレンスの方法に言及（4人）	・安心度，夢中度という視点から子どもを見ることの大切さ ・ステップをふみながら，カンファレンスを進めること ・普段の保育の中で，他の先生の意見を聞くことの大切さ
カンファレンスの雰囲気に言及（5名）	・どんな意見でも受け入れられる雰囲気で，話しやすかった ・正解はないということが感じられて，安心して話すことができた
幼児理解の深まりに言及（12名）	・子どもの何気ないしぐさからの表現に気づくことの大切さがわかった ・保育者がどのような受け止めをして，子どもの良さを見つけ，自信をつけていけるようにするかが大事だと感じた ・その子どもの心持ちを考えることの大切さを学んだ

以上のことから，外部参加者の多くが，多様な意見を聞くことのできる機会として，公開カンファレンス

をとらえていることが示された。また，カンファレンスの方法についての学びも言及されており，子どもの実態に即した指標を用いることや，段階的にカンファレンスの進行を行うことが，カンファレンスを円滑かつ効果的に実施する上で有益であると参加者が実感していることが示された。また，公開カンファレンスが自由な雰囲気で正解を求められることがなく話しやすいという意見が見られた。さらに，幼児理解の深まりに関する言及も多数見られ，特に子どもの「今，ここ」の姿を受け止めて幼児理解を深める方向での学びがあったことが示された。

アンケート質問②「公開カンファレンスに参加してみて，あなたの園で実践やカンファレンスに活かせそうなことはありましたか？」に対する回答は表５の通りであった。

以上の結果から，公開カンファレンスに参加した外部の保育者は，おおむね自園での実践やカンファレンスに活かせそうな学びを得ていることが示された。

表５　自園での実践やカンファレンスに活用できることに対する回答

1.とてもあった	2.ややあった	3.あまりなかった	4.ほとんどなかった
23（68%）	11（32%）	0（0%）	0（0%）

表６　自園での実践やカンファレンスに活用できることに対する自由記述

内容（人数）	記入例
様々な意見を出し合うことの大切さに言及（5人）	・子どもを様々な視点からとらえることが大切だとわかった ・様々な意見が出ることが大切だと園に帰って話します
カンファレンスの方法に言及（12人）	・安心度，夢中度という視点を用いたカンファレンスをしてみようと思った ・特別な場面や子どもを取り上げなくても，日常の一部分について話し合いができることがわかった ・ビデオを用いることで意見が出やすくなるので取り入れたい ・段階を追ったステップや，子どもの姿を振り返るための4つの視点を取り入れたい
幼児理解に関して言及（6名）	・どんな意見でも受け入れられる雰囲気で，話しやすかった。 ・正解はないということが感じられて，安心して話すことができた。

その中身を述べる自由記述は27人の記述があった。それらの内容をまとめたものが表６である。

以上のことから，本カンファレンスの実施形態や用いた指標，およびカンファレンスの持ち方などについて，多くの保育者が有効性を見出し，自園でも活用してみたいと考えていることがわかる。

４．インタビュー調査

アンケート調査により，公開カンファレンスが外部参加者に学びを与えていることが示唆された。しかし，これらの結果は，公開カンファレンス独自の意味とは言えないことも考えられた。そこで，自園においてもカンファレンスを行っている保育者にインタビューを行うことで，公開カンファレンスの意味をより詳細に把握したいと考えた。

広島大学附属幼稚園の公開カンファレンスに参加経験があり，自園でも『子どもの経験から振り返る保育プロセス』に基づいたビデオカンファレンスを行っている園が２園存在した。そこで，それらの園の保育者に対して，自園で行うカンファレンスと，外部の幼稚園でのカンファレンスの違いや意味について探るためにグループインタビューを行った。質問内容は，①自園のカンファレンスと，公開カンファレンスの違い，②公開カンファレンスを通しての学び，についてであった。

（1）グループインタビューの手続き

１）Ｘ園

日時：2012年12月

実施園の形態：広島市内無認可保育施設

インタビュー対象：園長及び職員計４名。うち２名は広島大学附属幼稚園の公開カンファレンスに参加経験があった。

実施の概要：Ｘ園で行われた自園のビデオカンファレンスに，松本，中坪，保木井，濱名が参加した。Ｘ園でのビデオカンファレンスは２回目であった。その後，半構造化したグループインタビューを行った。

２）Ｙ園

日時：2012年12月

実施園の形態：広島市内公立保育園

インタビュー対象：保育者４名。全員が広島大学附属幼稚園の公開カンファレンスに参加経験があった。Ｙ園は自園でも，２か月１度程度の頻度で，ビデオカンファレンスを行っている。

実施の概要：保育者に集まってもらい，半構造化し

たインタビューを行った。

（2）グループインタビューの結果

A園，B園のグループインタビューにおける特徴的な語りを，表7，8に示した。

表7　質問①に対する語り

①自園のカンファレンスと公開カンファレンスの違い	
X園Aさん 保育経験12年	自分が勤めているところの園の子どもたちの映像をカンファレンスで使ってみると，背景とかを知らないで見る場合と，いつも日常で過ごしている子どもの姿を見るのとでは全然違って，やっぱり文脈という部分が重くなり過ぎちゃうなと感じた。 このぐらいの年齢だったら，こんな遊び方とかしてほしいみたいな，大人側の願望みたいなものも強くなってきている気がする。
Y園Dさん 保育経験4年	自園だと，どうしても子どものことを知っているので，ある先入観で物事を考えてしまったり，見てしまったりする面もあり，”その子どもの今”を捉えることが難しいと感じてしまうことがある。しかし他園の公開カンファレンスでは，はじめてみる子どもの映像なので，先入観なしで，本当にその子どもの今になって安心度や夢中度について考えることができたのでよかった。
Y園Eさん 保育経験30年	自園でのビデオカンファレンスは，知っている子どものことなので，どういう背景があって，行動や遊びにつながっているかという事を気づくことができる。ビデオで見ることで，他の職員と共通認識をし，要因から活動のつながりもわかり，今後の援助や取り組みについて考え，実践できる。緊張せずにお互いの意見を出しあえる利点もある。 他園の公開カンファレンスに参加した場合は，自分の視点としてとらえたい事をしっかり持ってみることができる。“これはどうしてこうしてあるのか”など考えながら，見たり，話を聞いたりすることで，客観的に考えることができる。

以上の結果から，自園のみで行うカンファレンスのメリットとして，対象児の背景を知っていることで，その子どもの行動を深く読み取り，一歩踏み込んだ対

Y園Fさん 保育経験30年	自園でのカンファレンスでは，普段の様子もよく知っている子どもなので，一歩踏み込んだ対応について，具体的に考えられるし，担任はその中で，できることとできないことの整理もできる。園全体の取り組みなので，その子ども理解を全園をあげて深めたことにより，職員全員がその子どもの育ちを見守ったり，関わったり，声をかけたりできる。 他園のカンファレンスに参加することの意味は，“その子どもの「今，ここ」，その場での心持ち”で話し合われるので，どの参加者も，同じ土俵の上で意見が言えること。その子どもの保育士の先入観がない，関心ごとや，興味について発見できる。

表8　質問②に対する語り

②公開カンファレンスを通しての学び	
X園Bさん 保育経験8年	今まではカンファレンスをすると，子どものマイナスの面を見てしまいがちになる自分がいたが，マイナスを探すのではなくて，伸ばしていきたい，この子が楽しんでいる，よかったところを探すという作業を自分がしていきたいと思えるようになり，カンファレンスが楽しくなった。 今まではプロセスまで見なさいと言われても，見ていなかったしその手段も分からなかった。ビデオを通して，その子がやっている遊びをじっくり見ていて，それぞれが感じたことを言い合うカンファレンスを経験してそれがわかった。
X園Cさん 保育経験12年	今までは，日々の行事に追われて子どもそのもののことを語るような経験は全くなかった。それで子どもの内面的なものを，１個の事例を見ながら，みんなで話し合うって，何か，自分の見方だけじゃなくて，みんなの意見を聞きながら，「ああ，こういう見方もあるんだ」という気づきができることはとても楽しい。子どもそのもののことを語るカンファレンスの楽しさを体験することができた。

Ｙ園Ｆさん 保育経験30年	参加者全員が，その子どものその時の心持ちを探ろうとする。正解がないため言いやすいし，“○○すべき”などという人もいないため，発言しやすく面白い。また，カンファレンスを通して子ども理解を深めること，そしてそのことを自分の言葉として，発言したことは，自信となり，自園に帰っても子どもの立場に立った意見を，皆の前でも言えるようになった。 私自身が公開カンファレンスに参加して学んだことは，子ども理解を深めるには，対象になるビデオから離れず，子どもの「今，ここ」注目して，語りあうことで，子ども理解が深まるという体験と実感ができたことだ。

応について考え，園全体で共有できる点があげられた。一方，自園のみで行う場合は，逆に普段の文脈が強すぎたり保育者の願望が強くなりすぎる傾向があり，先入観から子どもにとっての「今，ここ」を捉えることが困難になることが指摘された。

これとは別に他園の公開カンファレンスに参加するメリットとして，その子どもの今になって安心度と夢中度を考えることができることがあげられた。

以上の結果から，公開カンファレンスに参加することにより，行動の成果や結果だけでなく子どもの活動のプロセスを見ることの大切さや，子どもそのものを語るカンファレンスの楽しさを学んだことが示された。また，公開カンファレンスで子どもの「今，ここ」を語り合った経験が自信となり，自園でも発言が変容した例も示された。

５．総合考察と課題

アンケート及びグループインタビューの結果から，公開カンファレンスが外部参加者に与えた影響について考察する。

（１）子どものことを語るカンファレンスを体験

「はじめに」で述べたように，園内研修の必要性は幼稚園教育要領でも保育所保育指針でも示されているにもかかわらず，全く行っていない園が１割，年間で６日以下の頻度でしか行っていない園が６割あるという実情がある。その理由としては，時間が取りにくいということもあるだろうが，どのようにして行ってよいのかわからない，今までに経験をしたことがない，ということがあるだろう。そのことを示すように，Ｘ園Ｃさんからは，子どもそのものを語ることの楽しさが語られていた。また，アンケートの質問①の自由回答からは，「どんな意見でも受け入れられる雰囲気で話しやすかった」という意見が見られた。このことは，多くの保育者が普段から子どもそのものを語るような経験をしているわけではないことを物語っているといえるだろう。また，カンファレンスを行ったとしても，一部の意見が正答となりそれ以外の発言や見方を許さない雰囲気があることが予想される。このことは，松井（2009）が「保育カンファレンスが有効に実施されないことが多く見られる。（略）とりわけ困難なのは，管理職や年配保育者が参加することで，協議の進捗に関係なく，最終的にはこれらの者の発言に結論が集約されていく保育カンファレンスである。このような保育カンファレンスでは（略）保育者自身の振り返りは行われない」と指摘している通りである。

それに対し，本公開カンファレンスは，外部の保育者に，正解・不正解に左右されずに子どものことを語ることの意義と楽しさを経験する機会を提供したことが，２つの調査から示唆された。このことは，自園での有効な園内研修の方法を知りたいという需要に対して，公開カンファレンスがそれに応えうることも示している。

（２）他園保育者の多様な意見を聞く機会

アンケートで多く寄せられた意見として，多様な意見を聞くことができたという学びが多く記された。このことは，グループインタビューにおいて，自園のみでのカンファレンスでは，対象児の文脈が重くなりすぎ，自明のこととして事象が語られる傾向になりがちであるという語りの裏返しでもあるだろう。松井（2009）は，共同体には，往々にして既有の知識や価値観が存在するため，対話のレパートリーが限定され，思考が発展しないケースがあることを指摘している。そして，特定の価値観に縛られず，ものごとを幅広く客観的に捉える存在としてのチェンジエージェントが，様々な意見を引き出し，多声性を保障し，カンファレンスを活性化することを述べている。

公開カンファレンスで，多様な園風土や保育観をもった保育者が集まったことで，それぞれの保育者が必然的にチェンジエージェントの役割を果たしたことで，多様な意見，様々な見方を学ぶ機会としてのカンファレンスが成立したのであろう。

（３）保育者としての成長

アンケートでは，公開カンファレンスを通して幼児理解の深まりを記述したものが多数見られた。また，グループインタビューからは，幼児のマイナス面でな

くよい面を見ていこうとする学びや，幼児理解が深まることで，子どもをしっかり見るという視点をもって保育に生かしているという学びが語られた。

保育者としての成長に関しては，省察の重要性が指摘されており（倉橋，1976；津守，1980），若林・杉村（2005）は，省察と保育カンファレンスを総合的に捉えるモデルを提案している。そのモデルでは，保育における知を，一般知，個人知，活動知，協働知に分け，さらに，これら４つの知を監視・評価・制御し統合するものとして，意識・思考を中心に位置づけている。そして，保育の知が再構築されるためには，個人知の中にある問題や古い保育観を浮き彫りにし，意識へのぼらせる「気づき」の過程が不可欠になること，その際，保育感を意識上に引き寄せ，揺るがす協働知との葛藤が伴う必要があることを指摘している。

公開カンファレンスに参加し，他の保育者の省察や幼児理解を聞くことで，幼児理解に関する視点のモデルを得たり，自らの幼児理解を振り返ったりする機会が与えられる。その際考察（2）に示されたように，カンファレンス実施園の保育者や，カンファレンスに参加した別の園の保育者の存在によって，視点の多様性が確保される。そのことが，自分の保育感や価値観を揺さぶるような「気づき」を与える。つまり，外部の保育者が入ることにより，それまでの文脈がはずされたり，異なる文脈が持ち込まれたりする。そして，異なる文脈間の調整により協働知が生じるのである。このことは，公開カンファレンスが保育の知の再構築という保育者としての成長に寄与する可能性を示すものと言えるであろう。

一方，協働知が生じる段階で終わってしまえば，個人の成長につながりにくい。意識・思考の働きを介した，協働知と個人知の循環や協働知と活動知の循環，さらには，協働知と一般知の循環が起こり，協働知を他の３つの知と相互に関連づけることが重要になる。言い換えれば，個人間対話だけでは知が十分に生きたものとならず，個人間対話と自己内対話の相互作用が重要になるのである。

本研究では，「安心度」「夢中度」という視点を用いた保育カンファレンスの外部公開が，大きく上記の３つの点で外部参加者の保育者の資質向上に寄与していることが示唆された。しかし，公開カンファレンスの限界や課題も同時に示された。一つは，切りとられたビデオ映像の限界である。その子どもの「今，ここ」を先入観なく見るという意味で，他園のビデオ映像を見ることは有効であったが，各保育者が普段の実践で行っているような対象児に対して深く踏み込んだ言及を行うことは困難であった。グループインタビューでも，自園のみで行うカンファレンスの方がより突っ込んだ議論を行うことができるとの語りもあった。これは，公開カンファレンスのもつ機能と，自園のカンファレンスのもつ機能の違いを示しているとも言えるだろう。目的に応じたカンファレンスを行っていくことが必要であろう。

また，カンファレンスを公開することは，一般的な園においては困難であることも予想される。実施可能な国立大学附属幼稚園などがその役割を果たしたり，チェンジエージェントとしての役割として他園のカンファレンスに参加したり，各園が連携をとって相互のカンファレンスに参加したりなどの取り組みが今後求められる。

引用文献

秋田喜代美・芦田宏・鈴木正敏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・淀川裕美・小田豊（2010）『子どもの経験から振り返る保育プロセス―明日のより良い保育のために』 幼児教育映像製作委員会

平山園子（1995）「保育カンファレンスの有効性」『保育研究』16(3)．18－29

厚生労働省（2008）『保育所保育指針解説書』

倉橋惣三（1976）『幼稚園真諦』

松井剛太（2009）「保育カンファレンスにおける保育実践の再構成―チェンジエージェントの役割と保育カンファレンスの構造」『保育学研究』第47巻第１号　12－21

松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・林よし恵・日切慶子・正田るり子・藤橋智子（2011）「保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか」広島大学学部・附属学校共同研究紀要（40）177－182

森上史郎（1996）『カンファレンスによって保育をひらく』発達68．ミネルヴァ書房1－4

文部科学省（2008）『幼稚園教育要領解説』

中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子（2010）「保育カンファレンスにおける保育者の語りの特徴-保育者の感情の認識と表出を中心に-」『乳幼児教育学研究』，第19号1－10

田代和美（1995）「保育カンファレンスの機能についての一考察」日本保育学会大会研究論文集（48），14－15

特定非営利活動法人u-School推進コンソーシアム（2010）「幼稚園における幼児教育支援方策に関する調査研究―⑦幼稚園教員等の研修の在り方―」『平成21年度文部科学省委託事業―幼児教育の改善・充

実調査研究』
鳥光美緒子・中坪史典・佐々木裕子・縫部義憲・米神博子・林よし恵・松本信吾・道下真穂・山崎晃・小林正夫・井上勝・七木田敦・深田昭三（1999）「保育観の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割―保育行為を内省するとは―」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第28号39－48
津守真（1980）『保育の体験と思索―子どもの世界の探求―』大日本図書
若林紀乃・杉村伸一郎（2005）「保育カンファレンスにおける知の再構築」『広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部（教育人間科学関連領域）』第54号，369－378.